1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江
Mase Yukie　宮城学院女子大学教授

第4回

モンパルナスの女王「キキ」
アートとメディアの狭間で生きる

連載も4回目を迎え，いよいよ1920年代という時代の渦中へと視点を移していく。今回取り上げるのは，「モンパルナスの女王」「ミューズ」と称された女性，キキである。パリのモンパルナスこそは，狂乱の時代の表舞台であり，そこの「女王」との称号は，この人物が当時放っていた光の強さを物語って余りある。

アメリカ人写真家マン・レイの代表作《アングルのバイオリン》（1924年）が，2022年5月に16億円（当時の日本円換算）という，写真にしては破格の価格で落札されたのは記憶に新しい。ターバンを巻いた女性の背中にバイオリンのf字孔を描き加えた絵柄は，一度見たら忘れられない。そしてこれがキキの背中である。マン・レイとは当時恋人関係にあった。

「キキ・ド・モンパルナス」の名で検索すれば，マン・レイによる写真作品をはじめ，キスリング，モディリアーニ，藤田嗣治ら多くの画家たちが描いた彼女の肖像画が次々に現れる。また近年では，彼女の名を冠した高級ランジェリーブランドも存在する。芸術家たちに愛されたミューズとしての彼女をめぐる語りは，セックス・シンボル的なイメージに偏っている。

本名はアリス・プラン（1901–1953）といい，フランス・ブルゴーニュに生まれ，父に認知されなかった6人きょうだいの1人として育った。12歳でパリに移り住み，読み書きを習得したのち，10代半ばから画家たちの裸婦モデルを始めた。持ち前の明るさで芸術家たちの輪に自然と溶け込み，「キキ」の愛称で人々に愛された。

実は，マン・レイに写真のモデルを頼まれた際，キキは「絵と違って裸体がそのまま記録されるのは嫌」と語ったという。彼の「僕は描くように撮るのだ」という言葉と，出来上がった写真の美しさに，心のこわばりをほどいた。しかし，当時のメディア環境の急激な変化を思えば，彼女が写真という表現手段に対して抱いた違和感は，身体がそのまま複製・保存されることへの主体的な反発ともとれる。レコードやトーキー映画の登場で，声や映像の記録技術は飛躍的に進化したが，キキはマイクを使う舞台より，小さなアトリエでポーズを取り，仲間と気ままに歌うことを好んだ。テクノロジーの進歩によって，生身の身体の感覚が置き去りになることに，彼女は抵抗を感じていたのだろう。

1929年，キキは編集者で恋人のアンリ・ブロカに勧められ，自身の半生を綴った手記『追想』（*Souvenirs*）を出版した。1980年には『モンパルナスのKIKI』のタイトルで邦訳も刊行されている。この本は，キキの自叙伝であると同時に，彼女の画家としての作品集でもある（今号の挿絵も彼女の作品）。彼女は「見られる」存在ではあったが，自ら描く表現者でもあった。しかし，彼女のこうした作品は，現在「キキ・ド・モンパルナス」と画像検索しても，目にすることはほとんどない。

1930年代に入ると，キキは麻薬に溺れ，ナチス占領下のフランスでは反独ビラを配って逮捕寸前となる。戦後，再会したマン・レイの目には，カフェ裏でひっそりと暮らす老女のように映ったという。キキが「モンパルナスの女王」として輝いた時期は，わずか十数年間にすぎなかった。

1953年の葬儀には，藤田嗣治を除いて，かつて彼女を描いた芸術家たちの姿はほとんど見られなかったという。

Bar at Villefranche, illustration from *Kiki's Memories*, edition Henri Broca, Paris, 1929

大修館書店『英語教育』７月号掲載
転載禁止